



成人向
コミック

J-Girl. エクスタシー



その日ララは、リトたちと共に海水浴場に来ていた。

リトの目を引こうと大胆なビキニを着てきたララ。

その姿の愛らしさに、周囲の男たちからの視線も熱い。

中でも、熱心な目を向ける男たちが数人いた。

男たちはララが1人になったのを

うまく見計らって、声をかけてくる。

「俺たち結城のタチなんだけど……」

あいつがララさんと呼んできてくれたさ」

その言葉を疑うことなく、

ララは人気の少ない場所へとおびき出された。

もちろんその場にリトはいない。

それでもララは、男たちを疑わなかった。

「あれー？ リトはどこ？ ねえリトは？」

「結城は……ここで俺たちと、

遊んで待っていてくれて言ってくれ、くくく」

粗野な笑いの奥に潜む悪意と劣情。

しかしララはそういうことには無頓着だった。

左右から腕を掴まれてもまだ、

男たちがリトの友人だと信じている。

「遊ぶって、なにをしてるの？」

「男と女の遊びって言えば、やることは決まってるだろう」

1人がビキニに覆われた乳房を鷺掴みにした。

1人は尻に掴みかかる。

「えー？ な、なにをするの？ エッチなところ触らないで？」

「ははは。こいつまだ分かってないみたいだぜ？

頭の悪い女だな！」

男たちの笑いに、さげすみの色が込められた。



し…尻尾は
ダメッ!

そして男たちはララの尻尾に掴みかかった。
「ああ!?! だ、駄目っ、そこは……ンンッ!」
ララの弱点は尻尾だった。
そこを掴まれると力が出なくなってしまう。
それでも普段なら、
ちよつと尻尾を掴まれたくらいというでもない。
しかし男たちのパワーは地球人を遙かに上回り、
ララの四肢を強く拘束する。
(うう……この人たち、
なんだか普通の地球人よりも力が強い?)
しかし見るからに地球人だ。
男たちにおかしなところはない。
姿を変えているのかもしれないが、
なにも分からない以上無茶はできなかった。
「ただ待つても面白くない。
こんないい体を楽しまない手はないよなあ、へっ」
「あ、あんっ!」
尻尾は駄目……ち、力が出なくなっちゃうよぉ」
ただ弛緩するだけではない。
尻尾は激しい性感帯もある。
このままでは男たちの思っつぽだ。
ララは少し焦りを感じ始めていた。



(いったいこの人たちなんなの？
ちよつと普通じゃないみたいだけど……)
劣情をあらわにした男たちは、
もはや少しの躊躇もなくララをまさぐっていた。
複数の男たちに全身を愛撫され、
ララは不本意な喘ぎをもらしていく。
「ちよつ、ちよつと。駄目だつてば。
なんでそんなところ触るの……んんう！」
振り払おうにも、尻尾を握られたままで力が出ない。
しかも男たちの力もある。
左右から乳房を鷲掴みにされ、強く揉み込まれた。
かと思えば、ピキニの上から乳首をつまみ、こねくり回す。
「くすぐつたいっ、お、オッパイも駄目え……
ああつ、触らないでよお！」
恥ずかしげもなく叫ぶララ。
リトでなくても、誰かの耳に届けば助けが来る。
しかし、周囲にはまったく人影がなかった。
それは男たちの迷惑通り。
(しまったら。まんまとハメられちゃったんだ……
うう、こんな人たちに)
男たちはまったく遠慮なく、
ララの全身をくまなく愛撫し続ける。
もちろん、ただ触るだけで終わるはずもない。
男たちは欲情に駆られていた。
まるで犬のように荒い息を吐きながらララをまさぐる。
その下品な雰囲気、ララはゾツと怖気を走らせた。



背筋を走るのは怖気だけではなかった。愛撫による快楽が徐々にせり上がってくる。

「だ、駄目……尻尾はこれ以上触らないで……あつ、いやつ、舐めちゃ駄目え！」

男の1人が、尻尾の先端を咥え込んだ。そして、フェラチオのようにしゃぶり出す。

弱点の中でも、先端は特に敏感だ。ララは嫌悪感の中にも、激しい快楽を見いだす。

乳首やクリトリスを舐められているのと同じくらい、いやそれ以上の快感が全身を駆けめぐった。

男たちに対する怒りや嫌悪はあつても、肉体的な快楽で体は反応してしまう。

(やだあ、体がビクビクしちゃうよ……こんな駄目なのにつ、感じたくないのに！)

男は尻尾の先端をしゃぶるだけではなく、その幹で股間を擦っていた。

しなやかな尻尾。それで股間のクレヴァスを前後させるようにして擦る。

ただ掴まれているだけでも感じる尻尾で女性器まで愛撫されては二重に感じてしまう。

ララはつい艶めかしい声をあげてしまうが、あわてて口を閉じる。

感じてしまつては男たちの思うつほど。なんとかして耐えなければならぬ。

しかしそんな苦悩をあざ笑うかのように、男たちは愛撫の手を強めていった。

「少しは素直になつてきたみたいだな……おとなしくしてれば、もつと感じさせてやる」

「ふ、ふざけないでよ……」

「こんなの、ぜんぜん感じたりしてないんだから……あぁッ！」

抵抗の声にも力が乗らない。逃げ出すための隙を見つける余裕も失いかけていた。



ああ…
感じちゃ駄目なのに
尻尾を握られると
どうしても
感じちゃうよあ…!

たっぷり
しごいてやる
からな

いつの間にか乳房をむき出しにされ、
激しく揉みだされた。その
激しく揉みだされた乳房はつままれ、強く引つ張られる。
痛みよりも性的な刺激が強い。
両の先端から生まれる甘い痺れに、
ララは心ならずも声をあげた。
「お、おっぱいいじくらないで……
ああ、乳首もっ、いやんっ！」
官能は胸からだけではなかった。
脚をがっしりと固めた男が、太ももや股間を舐める。
そのねっとりとした舌の動きは、
まるでナメクジに這われているような不快感。
しかしその不快感も官能と混じり合えば、
やはり甘い痺れになっていく。
「自分の尻尾でいじくられて感じてるのか。
いやらしい女だな」
違う。ララはそう言い切れなかった。
尻尾を強く掴まれるだけでも辛いのに、
その尻尾で股間を擦られる。
自分でヴァギナをいじっている感覚。
それは、強制的な自慰と呼べる行為。
（尻尾を握られてるせいで、
触られるの全部が気持ち良くなっちゃってる！）
性感帯からの快感は当然のこと。
不快感の怖気も、官能の痺れに感じられる。
ララは心ならずも甘い喘ぎを漏らしてしまうが、
それが良くないとは分かっていた。
喘ぐのをこらえ、なんとか抵抗しようとする。
しかし抗議は聞き入れられない。
相手が宇宙人であれば多少の無理も利くだろうが、
地球人ではどうしようもない。
でも、この人たち本当に地球人？
もしかしたら、宇宙人なのかも…
そう思ってはみても、
現実にはなにをどうすることもできなかった。



ララが悩んでいる間にも、
男たちの愛撫はエスカレートしていく。
全身をくまなく撫で回し、揉みまくっていく。
特に乳房は念入りだった。
太ももから尻にかけてを好む男もいて、
しきりに尻肉をなぶりつづけている。
そして、やはり尻尾への愛撫は
度を超すほどのものだった。
まるで、ヘスにそうするように、
根本から先端までまんべんなくしごき抜く。
そして先端を舐められ、しゃぶられる。
これはかなり鋭い快感があった。
敏感な部分を口に含まれ、
舌でねっとりとした愛撫をされる。
ソワソワとした不快感が
尻尾を伝って背筋を震わせる。
それが脳天に達する頃には、
官能の甘い痺れになっているのだ。
痺れが喘ぎを生み、喘ぐことで
また自分は感じさせられているのだと知る。
このままではひたすら喘がされ続けるだけ。
ララはなんと声を張り上げた。
「あ、あなたたちは誰!？」
「いったいなにが目的なの!？」
しかし、男たちは答えない。
薄笑いを浮かべたまま、愛撫に夢中になっている。
もしかしたら宇宙人なのかもしれない。
しかし、思うだけでは埒は明かない。
力尽きて抵抗してやろうと思っても、
すでに体の自由は奪われていた。



水着はすでに、上下ともむしり取られていた。リトにも見せたことのない女性器の奥まで知らない男たちに見られている恥辱。

ララは羞恥と怒りをなげ交ぜにして男たちを睨み付ける。

しかし男たちは、薄笑いを返すのみ。

なんの罪悪感も持っていないようだった。

(この人たち、かなりやばい。)

このままじゃ私、これ以上のことされちゃう！

男たちが何者であれ、その目的は明確だった。

ララを陵辱する気なのだ。

相手が地球人であれ、宇宙人であれ、

それは許し難いこと。

さすがに脳天気なララでも、

見知らぬ男たちに純血を捧げたいとは思わない。

「はっ、放してっ！ いやっ、リトっ、助けてリトっ！」

懇願は男たちの笑い声にかき消される。

リトどころか、どんな助けも来なかった。

「いい加減おとなしくして、

俺たちと楽しもうぜ！？」

性の快楽を楽しめばいいという。

しかし、そんなことができるはずもない。

だが体の方は正直だった。

男たちの愛撫に、性的快楽は止めどなく溢れ出す。

溢れた快楽は愛液の形でその度合いを表していた。

「ははは！ もう十分濡れてるな。

これならいつフチ込んでも大丈夫だぜ？」

ヴァギナを愛撫する男が息を荒くする。

ララはその言葉に重い恐怖を覚えた。

しかし恐怖よりも快楽の方が

上回り始めていることにも気付いていた。

逃げ出したい気持ちと、

感じていたい気持ちとが激しくぶつかり合う。

ララはもう、ずいぶんと理性を

失いかけているようだった。



そして、強い快感は
やはり尻尾の先から来た。
男たちはローターを取り出し、
敏感な尻尾の先にそれをあてがう。
鈍い振動音と共に来る痺れは、
甘くはなく鋭さでララを攻撃する。

「あああああー！」

それ駄目っ、感じるっ、感じ過ぎちゃうっ！」

尻尾にローターを当てられたのは初めてだった。

そのせいで、普通以上に感じる。

ビクビクとはね回るララを見て、

男たちは淫らにはやし立てた。

しかしそんなヤジも気にならないほど、

ララは快楽に没頭している。

激しすぎる快感が絶頂を促し、

ララの理性をさらに溶かし込んでいく。

(なにこれ！ 体の奥から、

なにかじわじわしたのがせり上がってくるっ！)

絶頂を知らないララは、

なんとかそのイヤな感じを押さえ込もうとする。

その抵抗が、さらに絶頂感を

高めていることに気付いていなかった。



あああ
あああ
!!

快楽に弛緩しきつっているララを抱きかかえ、男たちはさらに尻尾を責め立てる。先端にはローターを当てたまま。幹をまたへ二スのようにしごき始めた。

「ひつ、やあああああ! 駄目っ、それも駄目……お、おかしくなっちゃうー!」

もちろん、それは聞き届けられない。男は手慣れた様子で尻尾をしごき続けた。丁寧な全体を擦り、ときに強く握り込む。かと思えばまた優しく撫で回すのだ。ララはその巧みな愛撫に悦びさえ感じていた。恍惚の喘ぎがもれ、感動さえ覚える。だが、これは陵辱だ。すぐにそう気付いて、また抵抗しようとする。しかしむなしい抵抗にしかならない。ローターからの痺れに、また甘い声を出す。

(もう気持ちいいのが我慢できない! 私、おかしくなっちゃったんだ!)

(こんな人たちに好き勝手されて悔しいのに……!)

(私もう、気持ち良くて逃げられない!)

「あああああ、もう駄目……!」

「これ以上されたら、私本当に駄目になっちゃうよお!」

「い、いやっ、もしかして 私、イカされちゃうの!」

「だ、駄目。尻尾をしごかないでっ!」

「何か……何かがこみあがってくる!」

「はあ、はあ、も、もう駄目……なにか、なにか来るの……来ちゃうのお!」

快楽の痙攣がララを踊らせていた。ビクビクとはね回る体をもう押さえきれない。

一度跳ね上がるたびに快楽の電撃が走る。その痺れに乗って、絶頂感がせり上がる。

「来るっ、来るよっ! 変なのが来ちゃう……ああ、駄目っ、駄目えええ!」

ビクンッと大きな電撃が来た。同時に、甲高い喘ぎがあがる。

男たちの歓呼の声もわき上がった。下卑た笑いに、被虐心がくすぐられる。

ララは頭の中が真っ白になっていく感覚を覚えた。それが絶頂であることも悟る。

(う、うそ……私、この人たちにイカされちゃったの? リト以外の男の人に……)

だがその絶望は、絶頂の疲労感にかき消されるだけだった。

絶望より、罪悪感より、満足感の方が強いことを、体で覚えてしまっていた。



「おお、いったいつた。でも、まだ終わらないぜ？
もつともつと楽しませてやる」

言うとおりに、男たちの愛撫の手は休まることがなかった。
絶頂の疲労感に弛緩する体が、
さらなる快樂に叩き起こされる。

「ああ、な、なに？ 尻尾は……
もう尻尾は駄目え……んああっ！」

感度のいい尻尾の先。

男はそれを、ララのヴァギナへとあてがう。

そして、なんの躊躇もなくその先端を膣へと挿入した。

「あああああ！ 嘘っ、入る……」

尻尾が、いけない所に入っちゃうっ！？」

普段は自在に操れるはずの尻尾。

それが今や、男たちの遊び道具になっていた。

無理矢理膣へと突き込まれても、

自分では引き抜くことができないララ。

しかも尻尾の感度は強い。

もちろん、異物を挿入したくない膣もまた同じ感度。

快感を生み出すだけの性器を同時にいじくられ、

ララは鋭い嬌声を放つ。

これまでに感じたことのない官能が生み出され、

全身を駆けめぐり脳天に達する。

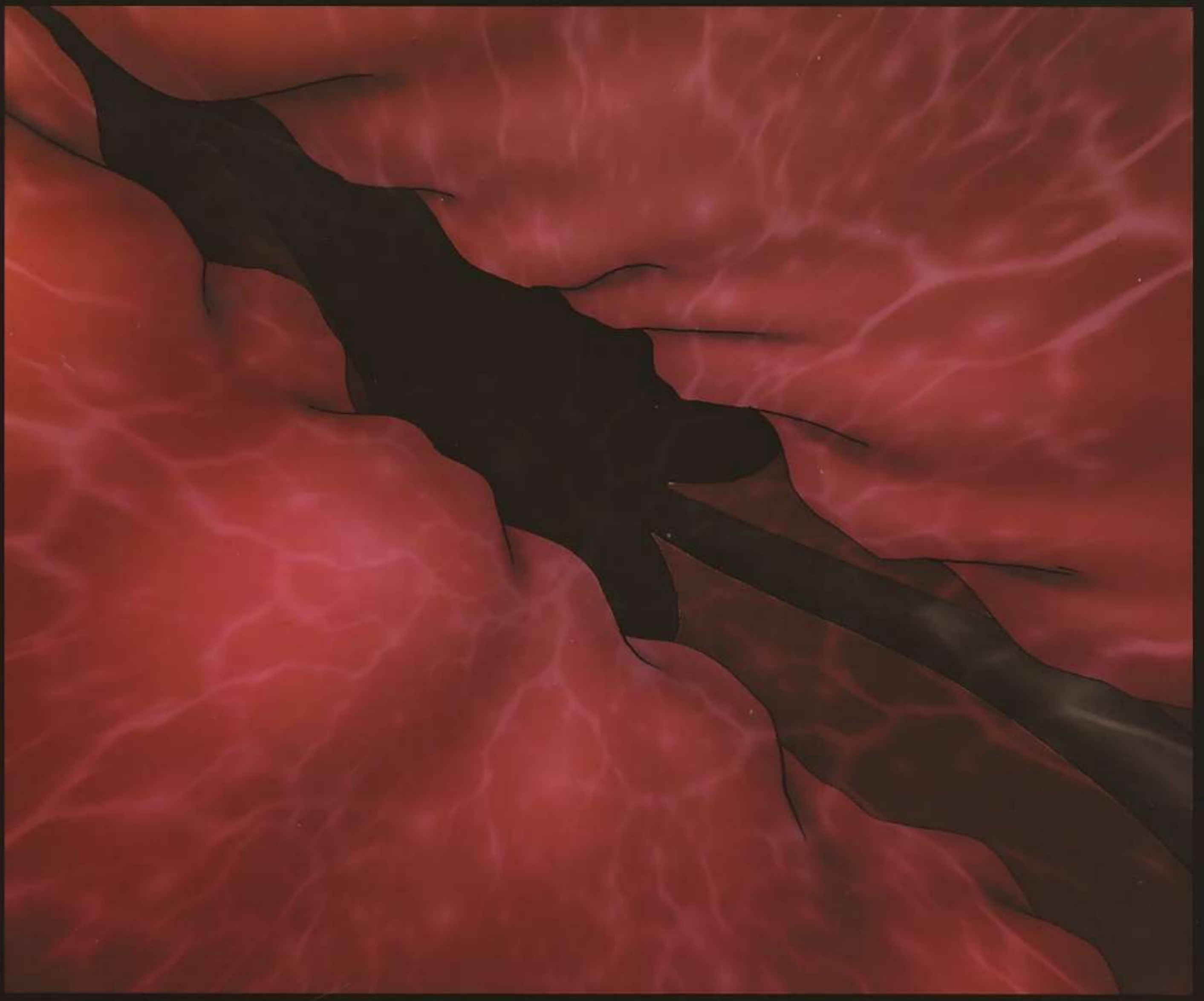
叫ぶほどに快樂が高まり、

快樂によつてまた叫ばされてしまう状態。

もはやそこに理性の介在する余地はなかった。

ただひたすらに快樂を訴えるのみ。

それはもう、性の虜とでもいふべき精神状態であった。



「これすごい！ これ、すごすぎる！」

気持ち良すぎて、頭がおかしくなっちゃう！」

敏感な尻尾が、敏感な膣を行き来する。

愛液があふれ、尻尾に絡み付いてぬめらせた。

擦り合う官能器官から生み出される快楽は、

常軌を逸するもの。

ララはもう、恥ずかしげもなく快楽を訴え喘ぐ。

喘ぐほどにまた、痺れてくる。

「こんなの駄目！」

またイクつ、イっちゃうからあつー！！

あああああー！！」

ビクビクと跳ね上がる体。

それは、ララの絶頂を表している。

ペエ的な快楽と、ヴァギナの快楽を

同時に味わっているのだ。

こんな状態が耐えられるはずもない。

ましてララは、まだ処女であった。

（もう駄目。なにも考えられない。）

もう、気持ちいいことしか分からないよ！」

声を張り上げると、つられて絶頂に達した。

連続の絶頂は心をむしばむ。

肉体的にも辛いので声を我慢してみる。

その我慢はすぐに破れ、嬌声がほとぼしかった。

「ひっ、いく、いくいくうっ！」

いや、こんなのもう耐えられないっ、もおっ！」

プツンと糸の切れるような感覚があった。

そしてララは、一瞬意識を失った……



「おつと。おねんねするには、まだ早いんじゃないのか？」

男に無理矢理起こされる。尻尾を引き抜かれ、愛液にまみれた先端をしゃぶられた。

抗議の声を絞り出そうとするが、それは快感の訴えにしかならない。連続絶頂の恍惚は、ララの理性をほぼ奪い去っていた。

「もつと……もつとおま○こ、気持ち良くして……いろいろなもの、おま○こに入れて」

「ああ、いいぜ。お望み通りにブチ込んでやる！ほら、ケツ上げろよ！」

男はまたなんの躊躇もなくヴァギナを見つめ、おもむろにペニスを突き立てた。

「あああああああー！ 来るっ、熱いの来るっ……お、おち○ち○入るうううー！！」

入れられただけで、体が強く跳ね上がった。挿入、そして破瓜による絶頂。

ララはもう、すべての刺激が快楽となっていた。破瓜の痛みでさえも。

男も最初の一突きからなんの遠慮もない。一気に根本まで押し込んで、子宮口を叩く。

そしてすぐにカリの部分まで引き抜いて、また無理矢理に押し込んだ。「あぐっ、あうっ！ すこいつ、これすこいつ、

深いっ、苦しい……気持ちいい！」肉棒の熱さ、硬さに喘ぐ。尻尾も気持ち良かったが、ペニスの快楽はまた違った。

犯されている、というマゾヒスティックな快楽も手伝っているのだろう。ララはあられもない声で、快楽を訴え続ける。羞恥心はもう失っていた。

「ああ、奥まで来るよっ、ズンズンして、おま○この中、壊されちゃいそう……あああ」

腹の中をノックされている。

その強すぎる刺激にも、ララは快感だけを覚える。強引で乱暴な行為がまた、被虐的な快楽を高めているのだった。



あああ
あああ
あつ！

男たちの動きはリズムミカルで、まるで訓練されたダンスのよう。

ララは何度も何度も絶頂に導かれ、そのたびに悲鳴のような喘ぎを放つ。

「も、もう、死んじゃう……おかしく、なっちゃう……もう、もう……」

……あああああ

絶頂しすぎて、意識がもうろうとしているようだった。

しかし、快樂にはしっかりと反応する。男たちを悦ばせ続けている。

そそり立ったままの乳首をつまむと、びくんと跳ねて膣を締め付けた。

粘膜の薄皮一枚隔てたところでぶつかり合うペニスたち。

その破壊的な刺激が、失神させてもすぐにララを覚醒させた。

「ああ、早く。早く終わらせて……」

もう、もう……私、壊れちゃうよお……」

「馬鹿言うな。そう簡単に壊れてもらったらこまるぜ？」

「そうだな。それに、一度射精したくらいで

終わると思われるのは心外だぜ？」

男たちはまだまだ余裕があるようだった。それに、

まだ挿入していない者もいる。

(ああ……私はもう、何度いつても許されないんだ……)

ララの思いに答えるかのように、男たちの動きが早まる。

体内のペニスたちが、倍の大きさにもふくれあがったように感じた。

「ほら、いくぞ！ まずは最初の射精だ……子宮の中まで満たしてやるぜ！」

「あああああああ……」

まずは直腸の中が精液の熱さで満たされた。次いで、膣内。

男たちは射精したばかりだというのに、腰の動きを止めなかった。

ララもまた、終わることのない喘ぎを放ち続ける。

(もういい……私は、この人たちにイカされ続けるんだ……)

……それで、いいんだ)

陵辱は永遠に終わりそうになかった。



その日、三国久美は桜庭紫紀に呼び出されて裏手の倉庫まで来ていた。

しかし紫紀の姿はない。

しばらく待ったが、一向に現れる気配がなかった。

「やれやれ……お嬢様の気まぐれに

付き合わされただけか。帰ろうっと」

身構えていた久美が気を緩めたその瞬間、

倉庫の中から鞭が飛び出してきた。

「なっ!？」

これは、ブラックヘアクイーン……桜庭!？」

「油断しましたわね三国さん。」

その隙を待っていましたのよ……ふふふ」

「これはいったいなんの真似？」

クラスマッチの続きでもしようっていうの?」

にやりと笑う紫紀に、久美は怒りをぶつけた。

しかし紫紀は動じない。

これは魔法でやり合うしかないか。

とつさにそう判断する久美。

しかし、足下に落ちている

自分のプレートに気づいて、ソツとしてしまう。

(やばっ……これじゃ、クラスマッチのときと同じ……)

「おっと。あのときと同じミスはしませんわよう?」

久美のプレートを蹴り飛ばし、

なおかつ自らの鞭からも気をそらさない。

以前のように長くした

鞭を絡ませる方法を阻止するためだ。

「前と同じだと思わないうたきますわ……

さあ、ゆっくりと楽しませよう?」



「くう……さ、桜庭？」

「あんたいったい、なにがしたいわけ!?」

呼び出されて、いきなり鞭で縛られて怒らないわけにはいかない。

久美は紫紀のにやけ顔を

はり倒すくらいの勢いで睨み付ける。

「言ったでしょう?」

「あなたみたいな強い女を屈服させると……ふふふ」

ゾクゾクと恍惚の表情をする紫紀に、

久美はイヤなことを思い出した。

「首の後ろがゾクゾクウツてするのよね。」

「分かるでしょう? ねえ、分かるでしょう!」

「しまった……こいつ、変態だったんだ……」

てつきりもうあきらめたと思ってたのに」

クラスマッチのときはかろうじて引き分けた。

しかし、それでは足りなかったらしい。

紫紀は早くも頬を赤らめながら、

久美の痴態に見入っていた。

「こんなに激しいおっぱいをさらして……」

さぞかし重いんでしょうねえ、ふふふ」

「ちよつ、ちよつと待て!」

「お前、そんな趣味まであるのか!?!」

自在に動く鞭の先で、

体操服の上から乳首のあたりをくすぐる。

たまらず反応してしまう久美に、

紫紀は喘ぎ声さえあげてにじり寄ってきた。

「いい……いいわ三国さん。」

「やっぱりあなたを屈服させないと、もうおさまらない」

「こんなことしてただですむと思ってるの!?!」

「さあ、どうかしら。」

その強気がいつまでもつか……私に見せてくださるかしら」

話を通じない。

久美は紫紀の勢いに負けそうになり、そつと息を呑んだ。

おお、
すげーいい乳
してるぜ

こりやあ
犯しがいが
あるってもんだ

おとなしく
やられるだけじゃ
アンタらしくくないぜ？
抵抗してくれよな

とにかく、ブラックヘアクイーンの動きが鈍る隙を見つけて動くしかない。さすがに空手有段者の久美とて、魔法の鞭を引きちぎるほどの力はなかった。(まったく、こんな茶番に付き合ってもらえないっての)相手はしよせんお嬢様。適当なところでケリをつけられるだろう。しかしその考えが甘かったことを、久美はすぐに知ることになる。「三国さん？ あなたまさか、簡単に逃げられるだなんて思っているんじゃない？」紫紀が指を鳴らすと、見知らぬ男が2人、陰から現れた。「今日はあなたに、たつぷりと屈服してもらおうつもりなの……楽しみねえ、ふふふ」「お、おいおい。これはお前、冗談じゃすまないぞ！？」男たちは紫紀の配下なのか、目配せをされただけで久美の体に群がった。その目的は一目瞭然。久美の体操服を脱がしにかかり、みだらな行為におよび始めた。「くっ、こんなことして、ホントただですむと思ってるのか！？」や、やめろって！」男たちはにやにやとして、久美の言葉など聞き流していた。役得だとも思っているのか。男たちは乱暴に久美の体をまさぐり始める。「さ、触るな！ お前ら、これってちよつと洒落にならないぞ？」「洒落ではありませんもの……」彼らには、あなたを犯していただきますから」紫紀のサディスティックな笑みが彫りを深めた。男たちもまんざらではないといういやらしい顔で久美をまさぐり続ける。(じよ……冗談だろ?)さすがの久美も、血の気が引く音を聞いた気がした。



前回の轍を踏まないためか、紫紀は久美の拘束に徹していた。舎弟らしき男たちに久美を責めさせ、自分はそれをただ眺めて楽しむのみ。

(こ、こんな奴らに、好き勝手触られるだなんて……絶対に許さないんだから！)

紫紀の思惑はともあれ、

久美自身が戸惑い、冷静な判断ができずにいた。

普段ならもう少し考えて動けるだろうが、初めての男からの愛撫に狼狽するばかり。

そんな久美の様子が楽しいのか、

紫紀も男たちもにやにやと笑みをほころばせる。

「どうしたのかしら三国さん？ いつも強気なあなたはどっへ？」

「う、うるさい！ この程度で私が気弱になるはずないでしょ！？」しかし声の震えはごまかせない。

淫猥な視線にさらされ、久美はまた息を吞んだ。

(まずいよ。このままだと、こんな奴らに

私の初めてを奪われちゃう！?)

ソツとする話だ。それだけは避けなければならない。

しかし男たちの手は、容赦なく久美の秘部をまさぐる。

乳房も、そして股間までも。

「ちよつ、ちよつと待て！ そこはまずいつつ、

そこは……んああっ！」


ブルマの中に手を突っ込まれ、久美は激しい嫌悪感をわき上がらせた。

なんのためらいもなく女の股間をいじくる男たち。

その猥褻な行いが許せない。

しかし紫紀の鞭は、久美の体を縛り上げるばかり。

余計な隙は見せてくれなかった。



いいねえ
三国さんのこんな格好
そうそう
拜めるもんじゃないぜ

もう十分でしょ!?!
早く放して……!

男たちの愛撫はとどまるところを知らなかった。
次第に久美から喘ぎが漏れ出す。

だが、そんな弱ったところを見せるわけにはいかない。
歯を食いしばって耐えるのみ。

紫紀は久美のプレートを拾い上げ、
見せつけるようにして笑った。

奪いたくても鞭の締め付けは強くなるばかりで、
身動きひとつとれないまま。

「あんた人にこんな格好させるなんて!
自分がされたらって考えたことある!?!」

「馬鹿ね。私はいつだって、
あなたみたいな人を上から眺めるだけよ」

口舌するしかない久美を笑う紫紀。
人を見下す態度はさすがに堂に入ったモノがある。

そんな紫紀に男たちも感心していた。
どうやら、身も心も下僕であるらしい。

「ふふふ……もつともつと恥ずかしい格好にしてあげる。
楽しんでくれるわよね?」

軽く手首のスナップをきかせただけで、
久美をM字開脚させてしまう。

その体勢にまた羞恥心をあおられ、久美は紫紀を睨み付ける。
もちろんそんな目線はものともせず、さらなる高笑いをあげる紫紀。

男たちもその笑いに合わせて
にやけ顔を久美に見せつけ、また愛撫を再開する。

「こつ、こつ! 触るなっ、
そんなところまで……んああ! いやっ、そんなの!」

徐々に弱気になっていく久美の抵抗に、紫紀は強い官能を得ていた。
あと少しだ。あと少し攻めれば、この生意気な女が屈服する。

そのときを、ただ楽しみに待つだけでいい。
紫紀は恍惚のときを過ごしていた。



久美は下手に出て、なんとか場を納めようともしてみたがどうともならなかった。

それはむしろ相手の嗜虐心をあおっただけのようで、男たちはなにやら取り出した。

「な、なによ、そのドロツとしたのは……まさか、変な薬じゃないでしょうね？」

男は粘液をすくい、縛られたまま動けない久美の股間へと塗りたくった。

ねちよねちよとした気持ち悪さもさることながら、なすがままにされることにも怒る。

なんとか罵つてやろうと男を睨み付けるが、不意に女陰が痺れ始めて驚く。

「なっ!? なに、これ！」

「あんた、ほんとに変な薬塗ったんじゃないでしょうね？」
「それはホーレンゲ草で作った魔法薬で、気体になるとホレ薬的な効能があるのよ」

紫紀がさも楽しげに語りかける。

「でもね? それを液体状態でアソコに直接塗ると……求めずにはいられなくなるのよ」

「な、なにそれ……なにを求めらるって言うのよ?」
「決まってるじゃない……犯されることを、よ」

ケタケタと笑う紫紀。久美はまた血の気が引いていくのを悟る。確かに、こそばゆいというかじんわりとした痒さが女陰を襲っていた。

クリトリスがジンジンと痺れ、さらに腔内が熱くなっていく感じがある。(やだこれ。すごい強力な媚薬になってるんじゃないの?こんな耐えられるの!?)

耐えられるはずもない。

男の軽い愛撫で久美はこれまでになく快感を得る。胸を、そして股間を撫でられただけで、

脳天を突き刺すような痺れが走った。

それが絶頂感であることは、まだ処女の久美にはいまいち理解できていなかった。



最初の絶頂の余波で、ぐったりとしたままの久美。男たちはそんな久美の体操服にはさみを入れ、一息に全裸になるように切り裂いた。

「あ、あんたたちなんてことを……」

こんなこと、絶対に許されないんだから！」

すでに冗談ではないことは理解していたが、

服を裂かれては逃げ出しようもない。

久美は少なからず絶望を味わうが、

まだ弱みを見せるわけにはいかないと虚勢を張る。

「あら、大丈夫よ。心配しないでも、

服はなんとかしてあげるわ……それに」

紫紀の顔が、これまでになく悪意に歪んだ。

「コトがすんだら、あなたの記憶はきれいに消してあげる……」

私が満足すれば、だけど」

それは久美に屈服しろということ。

だがそれは、ただの屈服ではないだろう。

体も心も、徹底的な屈服……敗北を望んでいるのだ。

紫紀は狂気に駆られている。

久美は怖気を走らせ、息を呑んだ。

このままではただ犯されるだけではすまない。

もちろん、犯されるのもごめん。

しかしそれ以上に何をされるか分からない。

(クラスマッチのときのこと……だけじゃないわね。

この女、もうおかしくなってる)

「さあ三国さん！」

私をどこまで楽しませてくれるのかしら!？」

楽しみだわ!！」

見開いた目の奥に光る猟奇的な灯火。

男たちはそれを崇拜し、久美は恐れをなす。

陵辱の宴は、まだ始まったばかりだった。

体中
性感帯にして
差し上げますわ…

どういう反応を
してくれる
かしらね

「見てるだけでも飽きてきたし……そろそろ私も責めさせてもらおうかしら」
ぱちんと指を鳴らすと、男たちは仕組まれたように久美を縛り上げる。

紫紀の鞭による拘束を解き、普通の拘束具で久美の体を中空に固定した。

（逃げなきゃ！ こんなチャンス、もしかしたらもうないかも！）

確かにちよつとした隙があった。にもかかわらず、久美は反抗しきれない。

絶頂したばかりの体が自由に動かなかつたのもある。さらに媚薬が効いていた。

ジンジンと痺れる女陰の、その感覚に耐えられずにいるのだ。

「ふふふ、いいザマだわね……もつともつと、無様にして差し上げますわ」

魔法を解いた紫紀が、先ほどの媚薬を筆で塗りつけてくる。

筆のこそばゆさと、塗られた端から痺れ出す媚薬の感触にうめく。

しかしうめき声を発することさえ許されなかった。

男が背後から、また別の薬品を塗ったタオルを鼻口に当ててくる。

息苦しさからたまらず吸い込むと、意識がやけにはつきりと覚醒した。

「どう？ お目々はぱちりと開くでしょう？ それは覚醒させるための薬品なの」

筆をうごめかしながら、紫紀が楽しそうに説明してくる。

「媚薬で意識がもうろうとしては面白くないものね。意識は、しっかりとしてもらわなくちゃいけないわ。

あなたの、敗北宣言が聞けなくなるものね……ふふふ」

つまり、あくまでも屈服するその瞬間を楽しみたいということなのだろう。

確かに、ぐつたりとした女の痴態を見ても面白くはないかもしれない。

しかしそれは、久美にとっては激しい屈辱でしかなかった。

（体の自由が利かない！ こんな奴らに好き勝手されるだなんて！）

（せつかく逃げるチャンスがあったのに失敗するなんて、悔しいっ！）

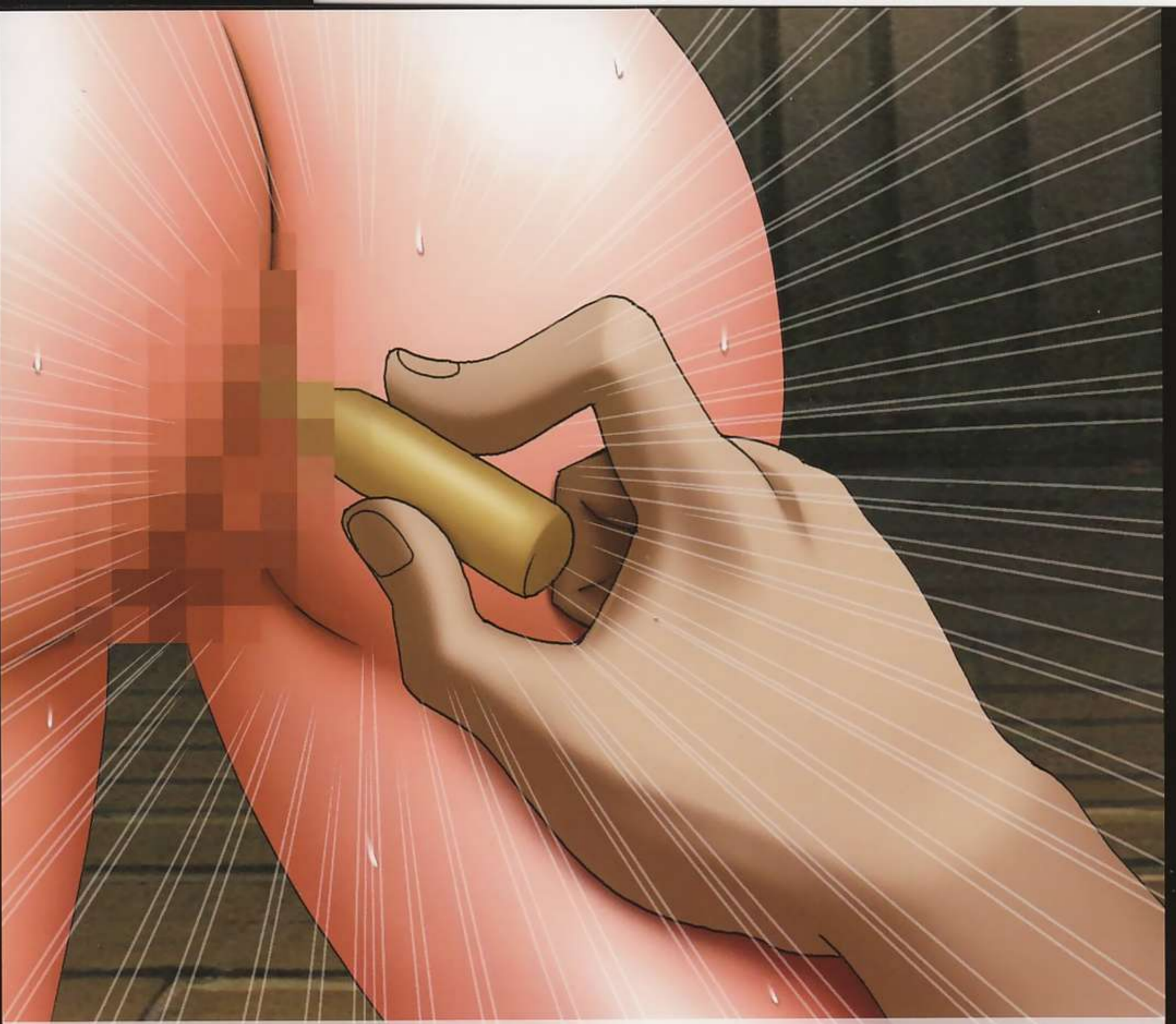
「な、なにをする気なの！？ これ以上おかしなコトしないで！」

「紫紀！ あんた、こんなことまでして勝ちたいわけ！？ こんなの勝ちじゃないわ！」

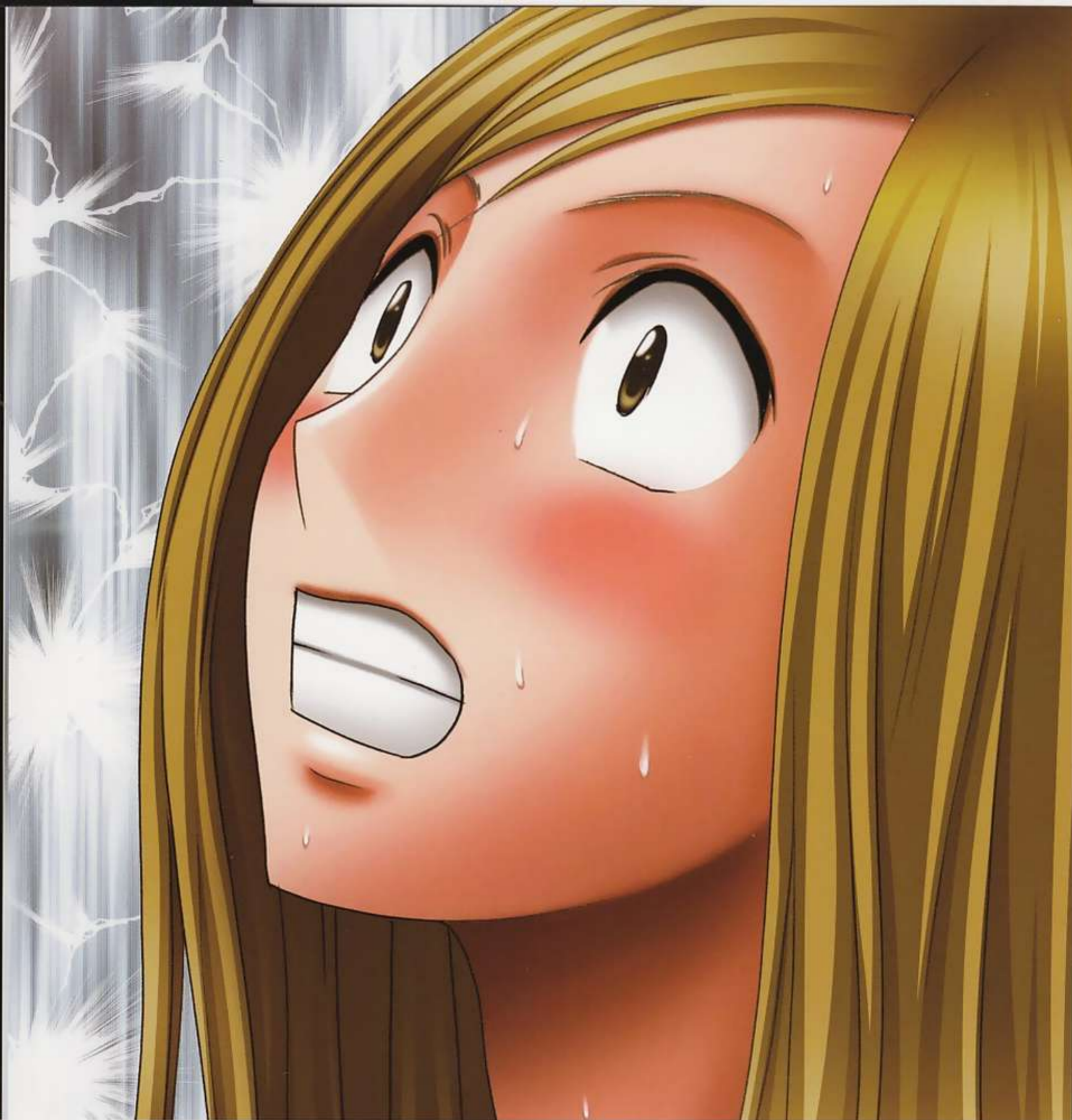
「いい加減にその汚い手を放しなさい！ あとでひどい目に遭わせてやるんだから！」

（カラダが熱い……！）

「ダメ……やめろ……あああ！」



媚薬を全身の性感帯に塗りたくられ、
否応なしに体が火照る久美。
ジンジンと痺れるような官能がわき上がり、
あまりの心地よさに気がゆるむ。
だがそうはさせまいと、
無理矢理に覚醒ガスを吸わされた。
体はゆるんでいるのに、
意識だけははつきりとしている状態。
その違和感にめまいを起こしてしまいそう。
しかし男たちの愛撫でまた目を覚ます。
(こんな感覚、初めてだわ……)
頭がおかしくなりそう)
愛撫による快感が、
ビリビリと脳天を突き刺してくる。
それでも官能の喘ぎをこらえる久美に、
男たちはさらにひどい仕打ちをした。
媚薬となつている魔法薬を、
ためらいなく肛門へと注入したのだ。



「ひっ、ひいひいひい!?
やめてっ、どっ、どこに入れてるのよおっ!」
「たまらず叫ぶ久美に、
男たちも紫紀もけらけらと笑う。
「いい声ですわね! もっともっと、
絶望の悲鳴をあげていいんですのよ!」
「肛門から直接注入された媚薬が、
腸内から体内すべてへ染み込んでいく気がした。
じんわりとした熱さのすべてが官能、そして快感。
久美は今、どこを触られても
快感になるような体にされていた。
それどころか、卑猥な言葉を
聞くだけでも悶えてしまう。
(なによこれ! こんな状態にされて、
どうすれば終わるっというの!?)
明確な意識が、
下手に理性的なことを考えてしまうと、
肉体と精神がぼろぼろな状態。
それだけでも、心が壊れてしまいそう。
紫紀はそんな久美を眺めて、
また官能に体を震わせた。」

「ああ、素敵。三国さん、もつともつとおかしくなつていいのよ！」

恍惚に歪む紫紀。その仕草の淫らさは、久美と同等かそれ以上のもの。

太ももを擦り合わせているのは、あふれ出た興奮を抑えきれないからだろうか。

「そして、身も心も私に屈服しなさい！ 口先だけではなく、本心からの服従を！」

言いながら、ビクビクと体を震わせる。それは、軽い絶頂なのかもしれない。

その気に当てられて、久美も男たちもごくりと息を呑んだ。

そして、男たちの愛撫が激しさを増していく。久美の官能もいや増していく。

「見ろよ。もうマ○コも指を咥え込んで放さないぜ……すげえキツキツマ○コだ」

「乳首もびんびんにそそり立つてよ。こんな勃起乳首見たことないぜ……」

男たちの息があがっている。興奮に彩られた行為が、久美の肉体を罵つていく。

（ああ、駄目！ こんなに乱暴にされてるのに、すごく気持ちいいよおっ！）

今の状況をどれほど拒絶しようとしても、体は快感を求めてしまう。

それが薬のせいだとしても、もはや久美にはどうしようもない。

頭がはつきりとしている分、快感がダイレクトに伝わってくるのが苦しい。

あまりに気持ち良すぎて苦しいのだ。早く絶頂に達したい、という苦悩に。

（駄目よ、駄目！ イっちゃったりしたら、こいつらの思うつぼ……あああああ！）

激しすぎる快感が、下腹部から徐々にせり上がってきていた。

指マンされている快感。

罵られているという被虐性が久美を昂ぶらせる。

媚薬の効能が体の中からも外からも染み渡り、

全身を官能器官に変えていく。

（イっちゃ駄目、イっちゃ駄目……こんな奴らに、負けたくなんて、ないっ！）

負けたくないという気持ちばかりが先に立ち、

快感を拒絶しようとする。

しかしそれは堪えきれぬものではなかった。

快感は溢れ出し、喘ぎに変わる。

「ああ、キチャうつ、来ちゃうつ！ もう駄目っ、駄目なのお！」

「ふふふ！ イきなさい！ 私の目の前で、淫らなアクメを見せなさいっ！」

あああ
あああ
あつあ
!

久美の喘ぎ、紫紀の罵声に合わせ、男たちの愛撫も強さを増していく。ジユボジユボと激しい水音をたてるヴァギナ、ピンとそそり立った乳首。頬の紅潮も、淫らな喘ぎも、こわばった体もすべてが淫らな芸術品となる。

(イクっ！ イっちゃやうよっ、私、もうイっちゃやううううううー！) ついに耐えきれなくなった久美が、恥も外聞もなく絶頂を叫ぶ。

「あああああああああ！」

激しい痙攣と共に潮を噴き、甲高い声が倉庫内に響き渡った。

「あ、あ、あ、あ……」

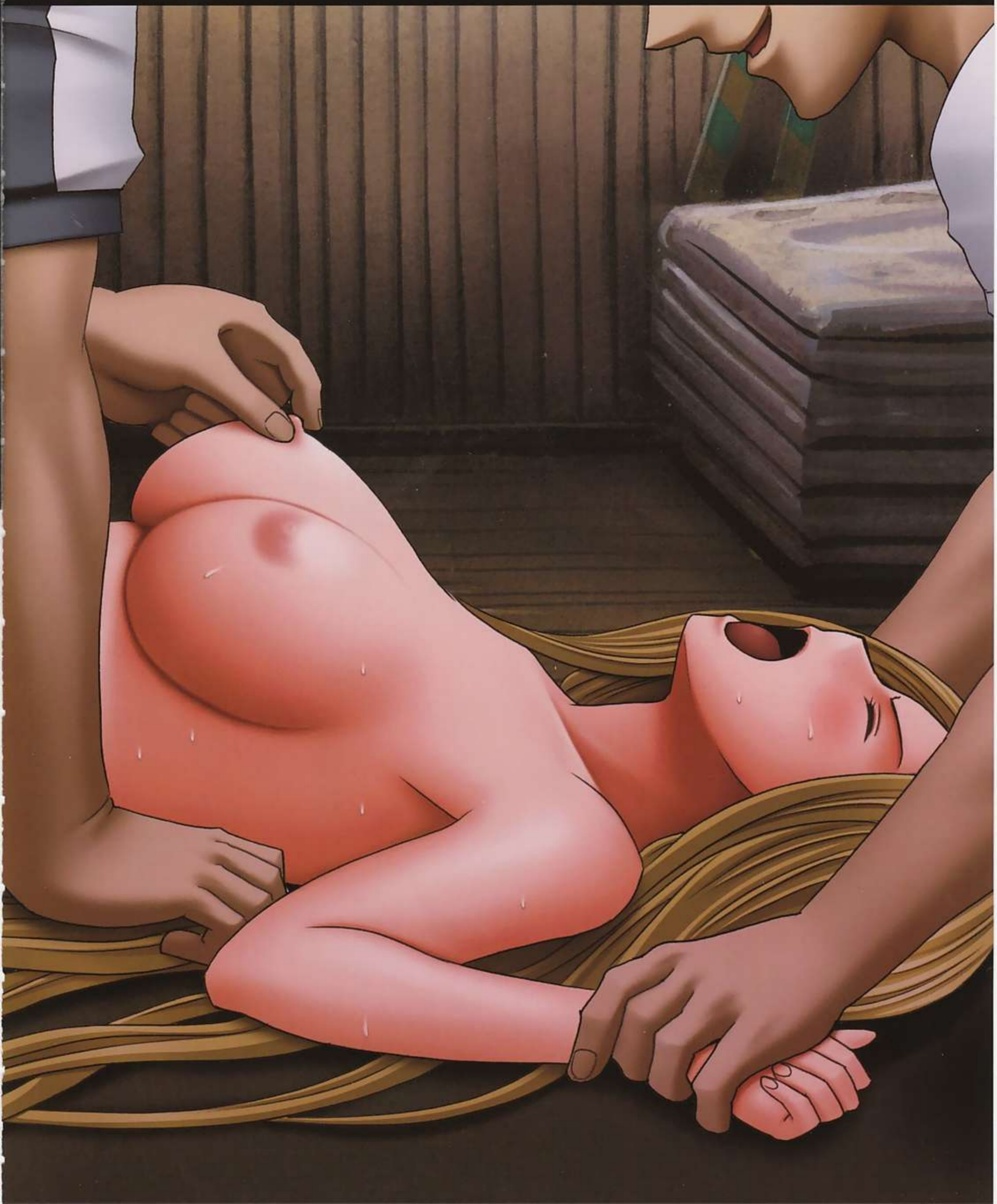
い、いった、イっちゃった……


……ああああ……」

久美の絶望に彩られた声に、紫紀や男たちはさらなる官能を得る。何度も何度も弾ける姿態に見入り、陶然とした吐息を漏らす。

「ああ……三国さん。私、もう耐えられないわ……」

紫紀の目の奥に、強烈な嗜虐の炎が燃えさかっていた。





紫紀が、男たちに目配せをした。そして男たちは自らに魔法をかける。

「な、なによそれ……いや。そんなもの見せつけないでよ……」

まだ絶頂の疲労感の中にいる久美。しかし、恐怖が意識を覚醒させる。

男たちはペニスに魔法をかけて、普通ではありえない大きさに仕立て上げていた。

ビクンビクンとうごめき、亀頭の先から濃厚そうな先走りを垂らしている。男たちは、紫紀からの命令を待っていた。

「いいわよ。挿入してあげなさい……思いつきり、遠慮なく奥までプチ込みなさい！」

久美の拘束が解かれた。そして床に押し倒される。

「ま、待つてお願い！ 負けを認めるから、もう許して……お願いっ！」

「そうそう……そういう台詞が聞きたくてしょうがなかったのよ……あああ、素敵」

紫紀の嗜虐心は、弱まるどころか増す一方。そして、男たちを促した。

「いやあああああああ！ やめてっ、お、犯さないでええっ！」

その願いは聞き届けられない。男の剛直が、久美の処女膜を破り去った。

すでに十分すぎるほど濡れていた膣は、男の太すぎるペニスも難なく飲み込む。

一気に最奥まで突き刺され、その痛みと快感で久美は一瞬、意識を飛ばした。

しかし、またすぐに覚醒する。失神させてもらえないような甘さはない。

男の挿入は、久美に初めてのセックスの快感と激しさを教えるものだった。

（なんで！？ なんで私がこんな奴に犯されてるの！？ 犯されて、気持ちいいの！？）

初体験の痛みも恐怖もない。そこにあるのは、ただ淫らな快感だけだった。

あああ
あああ
あああ
!

ペニスの熱さに翻弄されながらも、久美はなんとか最後の抵抗をしていた。折れかけた心をなんとか戻し、快感に負けてしまわないようにと気張る。しかし気張れば気張るほど、ペニスから与えられる快感の凄さが身に染みてくる。あまりに強い官能はまるで電気ショックのように久美の体を跳ね上げていた。

「ひいっ、ひいひいっ！　こんなの駄目っ、おかしくなるっ、駄目になっちゃうー！」

「いいわよ……もつと乱れてちょうだい。心の奥底まで、私にひれ伏すように……」

紫紀の官能も、すでに何度か頂点を越えているようだった。

犯される久美を見ながら、自らも股間をいじくっている。太ももを垂れ流れる愛液の量は、もはや尋常のものではなかった。

「まずは1回、膣内をザーメンで満たしてやるぜ……そしたら、すぐに交代だ」

男は2人。交互に犯してやるぞと笑いささやく。その絶望感にうめき、何度も許しを請う久美。その被虐的な叫びに乗って、強い快感がわき上がってくる。

（ああ、またいく……犯されてイっちゃうー？　いやなのに、いきたくないのに！）

膣内を掻き回される快感は、積み重なって久美の淫らさを増していく。あまりの剛直、その挿入に、先ほどまで処女だった久美の体は耐えられない。

「ああああ！　イクっ、また来るっ、ああああああああああ！」

同時に男も獣じみたうなりをあげた。それが射精の合図だった。ピクンピクンと跳ねる男の体。そこから伝わる快感が、久美の理性を溶かしていく。快感はもう、久美の心の一部になっているようだった。



あれから、もうどれほどの時間、犯され続けているのだろうか。

男たちはただペニスを太く

勃起させただけでは足りないようだった。

精力まで増強したのだろう。

休む間もなく、何度も何度も

久美を貫いていた。

「はあ、はあ……お、お願い……」

もう、許して……死んじゃうよお……はあ、はあ」

「気持ち良すぎて死ぬか？」

そりゃ、最高の死に方だよな、ははは」

元気が有り余っているのか、男はまた腰の動きを早めた。

膣内と直腸内。

ヴァギナとアヌスを同時に貫かれている久美は、鈍くうめく。

体内でこすれる、2本のペニス。

その快感にもう何度絶頂させられたことか。

「ね、ねえ……私の負けだから……」

ホントにもう……許して……ください……」

久美の泣き言に、紫紀は息を呑むだけ。

何度許しを請うても、聞き入れられることはなかった。

「素敵よ三国さん……あなた、本当に素敵……」

犯されるためにいるような人だわ」

恍惚とした紫紀。

その視線に当てられ、久美はまた絶頂に導かれていく。

「もう駄目……これ以上イかせないでっ。」

そんな目で、見つめないでえ……あああ」

まず、膣内のペニスが大きく跳ね上がった。

子宮まで精液が染み込みそう。

次いで尻穴の中にも、熱すぎるほどの精液が放たれる。

それが、肛門からあふれ出た。

「もう……許して……許して……ああ……また、イ……くう……」

壊れてしまえば、どれほど楽になるだろう。

しかし覚醒薬のせいで気絶もできない。

久美はうつとりとする紫紀の視線にさらされながら、

もう何度目ともしれない絶頂にその身を任せた。



その日、リンスレットリウオーカーはエステで夢心地になっていた。店の設備も、エステティシヤンの腕前も超一流の高級店。しかもプレゼントされて来たのですべてが無料というところが素晴らしい。(ま、プレゼントしてくれた男は、イマイチだったけどねー)以前、リンスに仕事を依頼した男からのプレゼントだった。多少いけすかない男ではあったが、礼儀は正しく金払いも良かった。このエステも報酬の一部というつもりなのだろう。リンスはなんの疑いもなく店を訪れ、こうして心地よい時間を過ごしている。マッサージを兼ねたそのエステティシヤンの腕前に惚れ惚れとしてしまう。あまりの気持ち良さに眠くなってくるが、寝てしまつてはもつたない。ひと撫でごとに自分が美しくなつていくという満足感までも楽しまなければ、静かに流れるBGMも、室内を満たすアロマの香りも。(ああ、本当に最高の店だわ……)この気持ち良さが、ずっと続けばいいのに、リンスは身も心も恍惚となり、全身の快楽を堪能する。その快楽が性的なものだとは、このときは思いもしていなかった。



エステティシヤンの指から生み出される
快樂に、リンスは時折甘い声をあげる。
それはもちろん性的な意味ではない。
しかし、心地よさは同質のもの。
一流の腕前だけあって

くすぐったさよりも快感が上回る。
その快感が徐々に積み重なっていく
感覚が性的なものに近いのだと思えた。
(なんだか恥ずかしいわ……)

でも、つい声が出ちゃうのよね)
最初からたつぷりとアロマオイルを
塗りたくられてのマッサージ。

エステティシヤンの指が、

そのオイルを全身に塗り込んでくる。

そのぬらぬらとしたうごめきは、

まるで愛液に濡れたヴァギナを愛撫されるかのよう。

(馬鹿ね。なにを考えてるのよ……)

そしてまた、温められたオイルを

たつぷりと塗られた。腕に、腹に、太ももに。

もちろんおかしな部分を触られることなどない。

相手はプロのエステティシヤンだ。

「どうですか？ 気持ちいいですか？」

「え、ええ……」

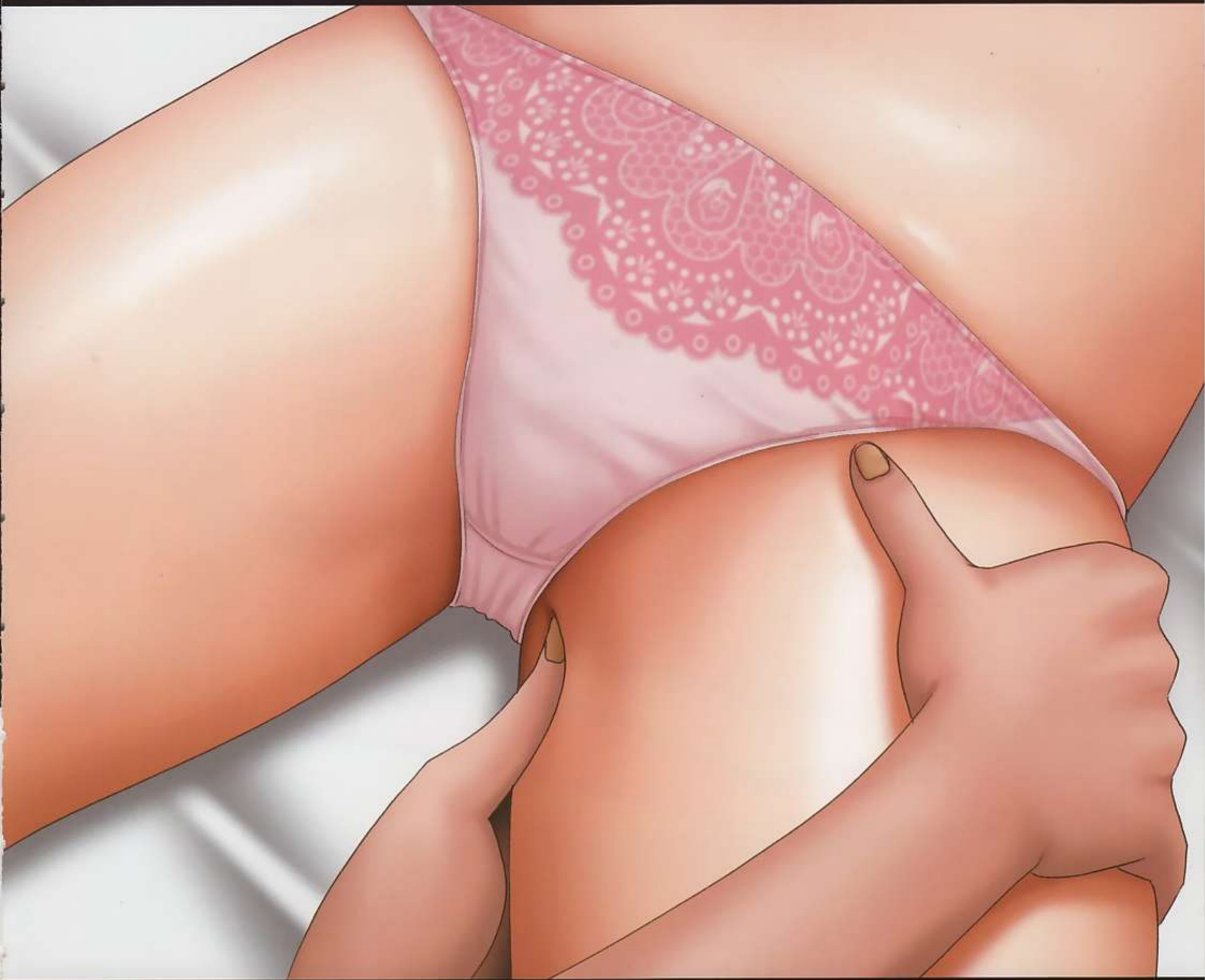
珍しく声をかけてくる。

その声にも、おかしな音色はない。

それなのに、何故だろう。

何故、こんなにもおかしな気分になってくるのだろう。

リンスは、マッサージに性的な快感を見だし始めていた。



マッサージをされ続けて、
肌の感度が上がってきているのだろうか。
ただ触られるだけなのに
気持ちよくなってきた感じがしていた。

「お、お上手なのね……」

「はい。お客様を気持ちよくして
差し上げることが仕事ですので」

確かに気持ちがいい。いや、良すぎる。

これまでにしてもらったことのある
どのエステティシャンよりも上手だ。

さすがは高級店。リンスはまだ、

自分の身体を襲っている性感に気付かなかった。

（あ、ああ……そんなところまで？

き、きわどい……ああ）

太もものマッサージが、股間ギリギリの
ところまで上がってくる。

あと一センチもずらせば、

ショーツに隠されている土手部分に届くだろう。
しかしその指先がショーツに触れることはない。

本当にギリギリの部分まで。

だがそのギリギリさは、

むしろ焦らされているかのようにも思える。

オイルなのか愛液なのか分からないほどの

ヌメリと、ギリギリの部位。

リンスはそっと息を呑む。

それは、快楽を待ちわびるような色気を持っていた。
ため息に乗る喘ぎももはや隠しきれしていない。

この快楽は、性的なものだ。

高級店ともなるとこれほどの快楽を得られるのか。

リンスは性的快楽がわき上がっていることを、

なんとか隠そうと必死だった。

（口を閉じてないと、喘ぎ声がもれちゃう……
気持ちよすぎるわ、これ）



身悶えているのがバレたのだろうか。

エステティシヤンの腕が上半身へと上る。

しかし腹部にはほとんど触れず、一気に胸部にまで上がってきた。

(ええ！？ む、胸までこんなに揉むの！？)

たつぷりとオイルを浴びせかけられ、

まずはしつかりと乳房を揉み込んでくる。

もちろん乱暴な荒々しさはない。優しく、

しかし強く揉みしだいてくる。

オイルのぬめりが、これまで以上に淫らなものに感じられた。

しかし、この行為が淫らなものでない証拠に、

乳首をこね回したりはしない。

胸部のマッサージなのだ、ということを示すように全体を揉むだけ。

それでも、性感の昂ぶっていたリンスには声を抑えることがつらい。

思わず漏れ出しそうになる声には、

やはり濃密な性のもだえが込められていた。

(駄目よ、駄目。ここで悶えたら、

私の方がおかしい人みたいじゃない)

ねつとりとした手に乳房をこね回される感覚は、

性的以外のなものでもない。

リンスは、ここがエステサロンだということにばかり気を取られていた。

まさかここでおかしくなことが起こるはずはないのだと。

だから耐えていた。

性的な快楽に耐えているのは、焦らされているコトと同じ。

これまでに積み重ねられた快楽は、

リンスをもう十分に欲求不満にしている。

そしてついに、エステティシヤンの指が乳首に触れた。



何
こいつらー？
いったい
いつの間に
囲まれていたのー？

「んあああ！ そ、そこはっ、駄目！」
快感の叫びと共に身を起こす。いや、起こそうとすることができなかった。
「えー？ な、なによこれ！？」 あんたたちは誰なのよー？」
気付けば、先ほどまでのエステティシャンはいなくなっていた。
代わりにリンスの全身を触っているのは複数の男たち。
エステティシャンの格好はしているが、その顔には淫らな笑みが浮かんでいる。
オイルにぬめった手の動きは、明らかにマッサージとは違っていた。
男が女を触る、いや愛撫する手つき。
もちろんそれは、快楽を生み出す。
エステとしての快楽ではなく、性的な快楽だが。
「ちよつと、触らないでよ。放して！」
男たちの手を払いのけようとするが、身体に力が入らない。
マッサージによる心地よい疲労からか。いや、違う。
（なに？ 身体に力が入らない……
頭の中も、ほんやりとしたままだし）
そんな疑問が顔に出たのだろうか。
男が笑いながら語りかけてくる。
「媚薬入りオイルとアロマはお気に召しましたか？」
「なんですってー！？ いつの間にそんな……
ま、まさか最初から？」
男の笑みが、リンスの疑問を肯定していた。
リンスはようやく、まんまと自分がハメられていたことに気がついた。



へへへ
息があがって
きてるな

...!!

もうたまらない
って顔
してるぜ

先ほどまでの夢心地が一瞬にして消し飛んでいた。気持ちよかったはずの指先は、いまや不快感をもよおさせるものでしかない。一流のエステティシャンと見知らぬ男たちでは、その腕前に天地ほどの差がある。そのはずなのだが、リンスは身体の奥底から込み上げてくる快楽を隠せない。全身を撫で回される不快感は、逆に性的な快感を強めているように思えた。(こんなことされて感じるはずなんてないのに……これも媚薬のせいなの!?)
弛緩しきつた身体。どうやら部屋にこもる香りにまで媚薬効果があるらしい。撫で回されていたときの快楽はもろろん、オイルに含まれていた媚薬のせいだろう。道理でいつも以上の快感があったはずだ。今更気がついてももう遅い。
「なにをするのよ、やめて!」
「放してって言うてるでしょう!?!」
「放してもいいのかい?」
「乳首をこんなにそそり立たせているのにな?」
「手のひらで乳首をこね回しながら、乳房全体を揉み込んでいた。確かに乳首が勃起しているのが分かる。それだけの快感があるのも分かる。しかし、こんな男たちの好きにさせていい身体ではない。乳首を、そして全身をまさぐられる。快楽に悶えながらも、リンスは男たちを睨む。だが男たちは、それさえも楽しいと言わんばかりに笑い合っていた。」



普段なら
こんな奴らに
好きにされたり
しないのに……!

「ほらほら、乳首が感じるだろう？」
「こんなに勃起させて、いやらしい女だ」
「ち、違う……これは、だって。媚薬のせい……あああ！」
左右それぞれの胸を、別々の男に愛撫される。
またたつぷりとオイルを塗られ、
乳房全体を揉み上げてくる。
そして乳首だ。
さすったりつまんだり、押し込んだりするだけではない。
まるでギターでもつま弾くように、
つんつんと先端を弾いてくる。
「あつ、きやつ！」
それ駄目つ、駄目え！ ビリビリ来ちゃうっつ！」
時に乱暴に、時に優しく乳房を揉み、絞り上げる。
その緩急を付けられながら、
ちくびも様々に弾かれていた。
（すこく痺れる……気持ちいい、いいけど、
こんなのイヤ！ 感じたくなんてない！）
声を押し殺すリンス。
しかし、乳首をつま弾かれるといやでも喘いでしまう。
その声には、隠しようもない
官能の色が塗り込まれている。
男たちはニヤニヤと笑いながら、
リンスの身体を楽器のように扱い続けた。
（このままじゃ私、こいつらのいいようにされちゃう……っ！）
オッパイへの執拗な愛撫に、
リンスは意識がもうろうとしてしまう。
快感による夢心地。
それは、先ほどまでとは毛色の違う恍惚状態だった。



体中にたつぷりと塗られた媚薬入りオイル。それで乳首がこねられる。

乳房を揉まれ、首筋を撫でられ、指先をしゃぶられていた。
(ああ……こんなの駄目。)

気持ちよすぎて、身体に力が入らない)

これは、見知らぬ男たちからの不愉快な愛撫のはずだった。しかし媚薬を塗りたくられた身体は、不愉快さよりも快楽をわき上がらせる。

「どうした？ もう抵抗しないのか？」

「ば、馬鹿言わないで……」

あんたたちなんかには、負けるはずないじゃないの」
凄腕の泥棒請負人であるはずの自分が、こんな快楽ごときに屈服している。

その敗北感がまた、リンスの身体から力を奪っていた。

(ああ……も、もうアソコも、)

あんなにくっしより濡れちゃってる……)

気付けば、すでにショーツも剥き取られていた。

丸見えの女性器。その谷間に見える粘液は、

決してオイルなんかじゃない。

リンスの身体の内側から溢れ出した、

天然の粘液。快感の証である愛液だった。

「オッパイ攻めだけでこんなに濡らしてるのか。」

とんだ好き者ですね」

「ち、違う……あんたたちなんかには、

感じさせられてなんか……ああ、んああー！」

弛緩している身体を、

更に身動きできないよう押さえつける男たち。

その手が胸のみならず、

容赦なく女性器にまで伸びていった。



んんんッ!

男の指が、膣内に潜り込んできた。

リンスはたまらず声をあげてしまおうが、それを手で押さえ込まれてしまう。

「んうううー!? んっ、んうううううー!」

「いいねえ。その苦しみがくような声がまたたまらないぜ……ごくり」

男は、口を押さえながら口内に指を潜り込ませてくる。指先で舌を絡め、唾液と媚薬オイルをこねくり回す。

(苦しい……でも、なにこれ。き、気持ちいい!?)

息苦しさの中にも快楽を見つけてしまうリンス。身体はもう、性の虜になっている。

だが心はまだ折れていない。だからこそ、まだ苦しいのだ。

「ははは、もうマ○コの中までとるところだ。まずは指でイかせてやるぜ!」
口内と同じように、膣内も指でこね回される。

リンスの全身に痺れが走った。

「んううううー! ンッ、んううううー!」

男の指戯は想像を絶する快楽を持って、リンスを責め立てる。

膣を犯す指、口を犯す指だけではない。乳首も、乳房も、脇でさえも。

ひとつひとつの手がリンスをイかせようという意志で襲ってきていた。巧妙なテクニクの指戯。それらがリンスを絶頂させるためだけに蠢く。

(こ、こんなの、我慢できるわけない! イく……イかされちゃううう!)

膣内の一番感じるところを擦られた。舌をつままれ、乳首をつま弾かれた。「んっく、ううっ! んんんんんんんんんんん!」

これまで、溜まりに溜まっていた快感がすべて弾けた。

リンスの我慢はいともたやすく打ち破られ、最初の絶頂をもたらした。



男たちの欲望に溢れる笑い声が響き渡った。リンスは絶頂の恍惚と疲労にぐったりとその身を横たえる。

しかし、男たちの攻めは終わるところか、更に勢いを増してきた。

「なにを休んでる。まだまだ、これから本番だぞ？」
「ちよ、ちよと待って……」

いま、いったばかりだから、だ、駄目っ！
もちろん、男たちはリンスの言葉など聞いてはいない。まだ絶頂の痺れが残る身体をまさぐり、更にオイルを浴びせかける。

全身をヌルヌルと愛撫して、絶頂の快楽を末端まで行き渡らせた。

（こ、こんなの駄目。気持ちよすぎるっ、こんなの、もうおかしくなっちゃうっ！）
悶え苦しむリンス。

男たちは追い打ちをかけるようにマッサージ器を取り出した。

「ひっっ！？ な、なにこれっ、痺れるっ、痺れすぎちゃうっ！」
電動マッサージ器を、

絶頂したばかりのヴァギナに添えた。始めから容赦なく、

強度の振動で女性器全体をまさぐる。リンスはもはや声を抑えることもできず、

ひたすらに喘ぐばかりとなった。

「そっ、そっ！ 駄目っ、感じ過ぎ……あああああっ！！」
人の手では出し得ない振動。

敏感なクリトリスを襲う快楽に強く喘ぐ。もちろん乳房への愛撫も止まらない。

全身をまさぐることも忘れない。

クリトリスが、膣口が強烈な振動に晒され、リンスの身体は何度も跳ね上がった。

男たちの手が休まることなど、ただの一瞬さえありはしなかった。



一度大きな絶頂をしてしまうと、次々と軽い絶頂の波が押し寄せる。リンスの身体は、今どこを触られてもイけるほど敏感になっていた。(駄目……こんなに気持ちいいなんて、心まで溶けていつちゃいそう) 不愉快なはずの男たちの愛撫。

しかし肉体的な快楽には逆らえない。それでも心まで折れてしまうわけにはいかない。リンスは辛うじて理性を持っていた。

その理性がいつまで持つのかは、もうリンス本人にも分からなかったが。

「オマ○コは中を掻き回されるのがいいか？ それとも電マで痺れたいか？」

「ど、どっちもお断りよ……！ いい加減……！ この汚い手をどけなさい！」 あまりに力のない抵抗。

男たちは失笑さえ漏らしてリンスをまさぐる。そしてヴァギナへの愛撫は、中と外を交互にされるようになっていた。

「あああああ！ 駄目っ、駄目っ………あああ……！」 電気マツサージ器がクリトリスを痺れさせ、そして次は指マンになる。

「ひいひい！ かつ、掻き回さないで！ そんなに……うああっ！」 1本や2本を挿入される程度ではすまない。

2人の男が左右から、膈壁をほじくるように挿入し、かき混ぜてくる。その間にも乳首はつままれ、乳房を揉み込まれた。

脇の下も、指先も舐められる。指で舌をつままれたかと思えば、

ディープキスで舌を絡め取られていた。

(もう！もう！ なにをされてるのかも分からない！) リンスの意識は、性の快楽にもうろうとなつてしまっていた。



身体をまさぐられ始めてから、
もうどれほどの時間が経ったのだろうか。
何度かの絶頂を繰り返したリンスは、時間感覚も失っていた。
そんなリンスを見つめる、

エステティシャンたちとは明らかに違う男がいた。

リンスがその存在に気付いたのは、声をかけられたからだだった。

「ああ、あなたは本当に美しい……特に乱れている姿は最高です」
ほんやりとした目で声の主を捜す。

それは、このエステに招待してくれた男。

紳士風の格好は、まるでこのエステの支配人のようにも見える。

しかしその目に灯っているのは、

男の性欲。たぎりまくった欲望の光だった。

「以前の仕事であなたとお会いしたときから、

犯したくて仕方がなかったんですよ」

丁寧な言葉の奥にも、

やはりケタモノじみた欲望が見え隠れする。

しかし男は、紳士的な態度を崩さないままリンスに歩み寄ってきた。

「私は紳士ですから、女性を犯すときも

ちゃんと気持ちよくなつてもらいたくてね」

そう言つて乳房を揉みしだく。ツンとした乳首をつまむ。

他の男たちは、また電気マッサージ器で女陰を強く責め立てた。

「あまり、力で抑えつけて犯すのは好きじゃないんですよ。」

快感で抵抗できなくさせてから犯すのが私の流儀なんです」

確かに、今のリンスはもう快感で抵抗力を失っている。

逃げ出したくても身体に力が入らず、更なる快楽を与えられ続ける。

しかし心はまだ折れていない。

だがそれは、リンスにとっては不幸なだけだった。



依頼主だった男は、すぐにはリンスを犯さなかった。今の今ままでずっとその痴態を見てきたのだろう。今更焦ることもないのか。

男ははた、他の男たちにリンスの身体をもてあそばせる。

「あああつ、駄目つ、も、もうこれ以上は、お、おかしくなっちゃうううつ！」

「素晴らしい！ もつと、もつとおかしくなってください！ もつと淫らに！」

男は、電気マッサージ器を手に、リンスの股間を愛撫する。振動する頭の部分を

膣に挿入せんばかりの勢いで押しつけてきた。

しかし男は、ギリギリのところまで器具危惧の挿入を抑えていた。そういうえば、ここまででもあそばれているのに、

本番の挿入はまだない。

待っているのだ。リンスが、本当に屈服するときを。

（イヤよ。私は負けない……）

こんな奴らに、屈したりなんかしないんだからっ！

しかし、身体はもう完全に屈していた。

快楽を求め、腰が動いてしまう。

男たちの愛撫に、身を任せてしまっている。

電気マッサージ器の快感にも抗えない。

込み上げてくる絶頂感に耐えきれない。

「あああ！ イくつ、また大きいのが来るうううっ！」

ビクンビクンと身体が跳ねた。強い絶頂感に、理性が薄れる。

「さあ。そろそろどうですか？」

本当に犯されたいと思いませんか？」

「ふ……ふさけないで……」

私は、あなたなんかには、負けたり……んああああ！」

負けたくない。

それだけが、リンスの理性をkarouうじてつなぎ止めていた。

「強情ですね……そこがまたいい。」

そろそろ、私の方が我慢できませんよ」

ぐつたりとしたリンスに、

男はためらうことなく屹立したモノを見せつける。

それから逃れる術は、もはやなかった。

ああ……
最高だ！

犯されるために
あるような身体だと
自分でも思いませんか？

はっ！

あッ！！

あ……

「では、挿入させていただきますでしょうか……」
犯させていただけます！」

男は激しく怒張した。ペニスをクレヴァスに押しつけてきた。犯す、という割にはすぐには挿入しない。まずはたつぷりとねぶる気らしい。

（駄目っ、抵抗できない。）

身体が気持ちいいことされたがつてる……駄目なのに！
男はまず亀頭でクリトリスを責め立てる。

その快感の強さに惑うリンス。

しかし、ペニスの温かさはない。

「どうですか？ 機械とは違うでしょう。」

生のペニスは気持ちいいでしょうー？」

「そ、そんなことない……」

気持ちよくなんて……ああ、な、ないわ……」

しかし、腰が動く。クリトリスではなく、

膣内にペニスを導くように。

男もそれが分かっているのだろう。

ニヤニヤと笑いながら、リンスを眺めた。

ここまで来たらもう我慢比べだ。

リンスは、絶対に負けまいと歯を食いしばる。

だが、男の方はあまり勝負する気もないのか、

気楽にヴァギナをもてあそび続ける。

亀頭で谷間を擦りつけ、

リンスの身体が跳ね上がるのを楽しんでいる。

（こんなの……こんなの、もう耐えられないッ！）

言葉にさえしななければ負けたことにはならない。

リンスはもう、理性をなくしていた。

「……さて、もう限界です。犯しますよ！」

「だ、駄目！ それははっ、い、入れちゃ駄目っ！」

言うが早いか、男はその激しい肉棒を、

一気に根本まで押し込んできた。

挿入の衝撃で、リンスはまた激しい絶頂感に見舞われる。それでも、男に屈服する言葉だけは吐き出さなかった。



あああ
あああ
あつあ

男のペニスは、リンスの一番深いところにまで突き刺さってきた。子宮口を叩かれる衝撃に声も出ず、また息苦しさに喘ぐばかり。(こ、こんなに深く突き刺されたこと、ない……)

ああ、おかしくなっちゃうううう) 全身を性感帯にされるほど愛撫され、今もなお媚薬入りのオイルが塗りたくられる。ぬめぬめとした感触がまた快感をあとおり、リンスの理性を奪い続けていた。

「ほらほら、いい加減に認めてしまいなさい……セックスの快感に負けているのだと!」

「ち、違う……私は……私は、まだ……」

ああああああああああああ

声を出すと、そのまま高い嬌声へと変わっていく。体内にわたかまる快感を、

声に乗せて吐き出したがつているのだろうか。

(駄目よ、我慢するの。)

絶対に負けてなんかやらないんだから……っつー!)

体中を、そして膣内を襲う快感は、

もうリンスの耐久力を遙かに超えている。

それでも我慢できているのは、自尊心が残っていたからだ。

しかし、それももうほとんど残っていない。

快樂の前に、自尊心など役に立たない。

(でも駄目、でも駄目……絶対、絶対……)

感じてなんて、やらないんだからあ!

そんな思いも、身体全体を支配する快樂には勝てなかった。

「おおお! そろそろ、最初の一発を出して差し上げますよおおお!」

「いや、いや、中つ、中に、出さない、でっ、壊れるっ、壊れちゃうううう!」

激しく腰を振る男。そのペニスが、膣内で破裂するのが分かった。

「いやあああああああ!」

くううあああああああああああああああ!」

リンスはもう、自分でもなにを口走っているのか分からなくなっていた。

分かるのはただ、負けたくないという思いのみ。

しかしそれは、もはや思っただけでしかない。言葉だけでしかなかった。

「ふふふ、まだまだこれからですよ。」

まだたつぷりとあなたを犯して差し上げます」

男は射精した。ペニスを引き抜くことなく、続けて腰を振り始めた。

その快感たるや、リンスの理性をことごとく失わせるのに、なんの不足もなかった。



リナリーは決して油断をしたわけではなかった。相手の方が一枚上手だったらしく、リナリーの武器の弱点をついてきたのだ。「くっ……私としたことが……」

腕を吊され、自慢のタークフーツを封じられてしまう。

これでは反撃しづらい。

AKUMAはニタリと笑い、

たつぷりと生やした触手で少女を捕らえる。

「くくく、いい女だ。」

やりがいがある、犯しがいがあるぞ。

たつぷりと犯してやる！」

AKUMAの言葉にギリリとするリナリー。

そういえばこのAKUMAは、

元々強姦魔で手配されていた男だ。

舐めるような視線に怖気が走る。

AKUMAになつても、本質は変わらないらしい。

AKUMAに犯されるなど冗談ではない。

リナリーは足に力を込める。

黒い靴がうなりを上げるが、

AKUMAはそれをモノともせずには押しさえ込んだ。

「無駄無駄。お前の武器は、

こうして絡め取ってしまえば無用の長物だ」

「くうう！ 馬鹿にしないでよっ、

こんなコトくらいでえ！」

必死でもがくりナリー。

しかしAKUMAには届かない。

そしてAKUMAは、あざ笑うかのように

触手を全身から溢れ出してきた。



こんなAKUMA
初めてだから
気のゆるみがあった…

ウネウネとした触手たちが、リナリーの全身を撫で回し始める。1本1本が意志を持つ触手に触れられるのは、まるで大勢に翻らされている気分。

「くっ！このっ！」

「その声、その目。いいぞ、もっと抵抗してくれ……その方が、犯しがいいがある」

まずは前戯とばかりに服の上からまさぐってくる触手たち。

しかし首元やスカートの中までも進入して、リナリーの柔肌をも撫で回す。

「いい肌だ……若い女は最高だな。」

それに、エクソシストならばなお良い」

AKUMAの笑みに、挑発のないやらしさがこもる。「もっと抵抗していいんだぞ？」

強姦はハードルが高い方が燃えるというものだ」ゲラゲラと笑うAKUMAに、

リナリーは強い嫌悪感をわかせた。

こいつはもう、犯さなければならぬ、という妄執に駆られているだけの化け物。

そんなやつに、自分の体を

好きにさせていいはずなどない。

(こうなったら、徹底的に抵抗してやるわ。こんな奴になんか絶対に負けない！)

決意も新たに、リナリー

はその闘争心を燃やし始めた。

すべすべとしたいいい肌だ…
体中触りまくって
やるからな

ほあ

ほあ

ほあ

どこが感じるんだ？
教えてくれれば
そこばかりを
いじくってやるぞ

「そろそろ感じ始めたか？」

この邪魔な服は剥ぎ取らせてもらおうか！
触手が服の中に潜り込み、一気に破り去ってしまう。
教団特製のスーツがまるで紙のように簡単に破られ、
さすがにリナリーも息を呑む。

「いいぞ。そのおびえた表情……」

もつと俺を楽しませてくれよ！」

「こ、これしきのことだ、」

AKUMAを恐れたりなんかしないわ！」

しかし柔肌をさらされ、

少なからず羞恥心と恐怖がわき上がる。

それをAKUMAに悟られるわけにはいかない。

リナリーは虚勢を張って睨み付けた。

「おお、もつと抵抗しろ。」

もつと、もつと俺を楽しませろ」

もちろんそんなことで

AKUMAがたじろぐはずもない。

むしろ悦びのうめきをあげ、

リナリーの全身をまさぐり続ける。

（だ、駄目。口でなにを言っても、

まともに通じるわけがないわ！）

相手方だの人間の強姦魔だとしてもそうだろう。

さらにこいつはAKUMAなのだ。

人としての倫理など、もはや欠片さえ残っていない。

話を通じるはずもない。

「くくく。小振りながらも、張りのあるおっぱいだ……」

股間はどうだ？ んん？」

すでに人間ではない証拠の触手が、

リナリーの秘部を撫で回す。

まだ快感よりも、恐怖や怒りなどの

感情が勝っているため、官能の証はない。

しかしそれも、時間の問題だと思われた。



ジタバタともかくリナリーをさらに押さえつけようと、触手が全身に絡む。腕や、自慢の脚まですべて身動きできぬよう押さえられるまで、ほんの数秒。
（まずい。これじゃあ、本当に抵抗できない……！）
AKUMAは余裕の笑みでリナリーを見据え、数本の触手を見せつけるようにする。
「な、なによそれ……やめてっ、そ、そんな！」
太くこついただけだった触手の先端から、やたらと細かい動きをする触手が現れた。軟体動物の足先を思わせるそれが、リナリーの薄桃色の乳首に絡み付く。
「ひあつ、あつ！ く、くすぐりたい……んんっ、いやっ、なにっ！ これっ！」
人の指で愛撫されるのとはわけが違う。細い触手の動きは、リナリーを喘がせた。くすぐったさの中から次第に快感がわき上がってくるのがわかる。
触手の愛撫で乳首がそり立っていき、立った乳首にまた触手が絡み付く。
「んくうう、さ、先っぼ引っ張らないで……んあああ！ そ、それ駄目えっ！」
乳首の先から、全身に甘い痺れが走り始めた。



(なによこれ。こ、こんな程度で、
感じ始めるはずなのに……つく！)

AKUMAに愛撫されて感じるはずなどない。
それは甘い考えだったか。

ふと見れば、細い触手の先からまるで

先走りのような粘液がにじみ出していた。

「おやおや、どうした？」

まさか、もう抵抗できなくなったのか？」

「ば、馬鹿にしないで。これしきのこと……

んつく、感じたりなんかしないわ……」

しかし言葉に喘ぎが乗ってしまう。

そのことがさらなる羞恥を生んだ。

頬が赤らんでいくのが分かる。

それは快感への抵抗が生む紅潮でもあった。

(この粘液、もしかして!?)

媚薬効果でもあるのか。

AKUMAは粘液を乳首のみならず

胸全体になすりつける。

そして乳房を揉み上げた。

ジンジンとした感触が、胸全体かた溢れ出す。

「くうう……こ、こんなの、こんなの……!」

耐えられないことはない。

リナリーは必死でもがき続けた。



そんな抵抗も、AKUMAにとっては強姦の楽しみでしかない。

舌なめずりしながら、

細い触手の先端で乳首をいじくり回す。

「あああああ！」

「だっ、駄目っ！ 今触られたら、んっ、んんっ！」

「いい声だ。もつといい喘ぎを聞かせてくれ。」

もつと快感の悲鳴を！」

喜び勇んで触手をうごめかせるAKUMA。

乳首をまさぐる細い触手だけではなく、

全身をも撫で回し続ける。

首筋や耳元にも細い触手を這わせ、

くすぐるようにはしていた。

特に乳首の痺れはすごい。

乳輪をくすぐりながら、乳首に絡み付く。

そして乳首をつまむようにして引っ張られ、

不意に放されたりもする。

女を悦ばせる方法を知っている触手だった。

リナリーは苛立ちつつも感じてしまう。

だが、この程度のことでは心を折るわけには

いかないのが、エクソシストだった。

「私は、ま、負けないんだから……っく！」

「くくく……強情な女を屈服させるのが、

強姦の楽しみのひとつなんだよ」



AKUMAはもちろん、股間への愛撫も忘れていなかった。乳首などへの細かい触手とはまた違い、

股間へはまるで舐めるような責めを繰り返す。

(くろうう……まるで大勢に舐められてるみたい。)

気持ち悪い……(けど)

気持ち悪いが、気持ち良くもある。

しかし、それを認めるわけにはいかない。

AKUMAになど感じさせられる

わけにはいかないのだから。

しかし舌先のような触手はリナリーの思いなど、

歯牙にかけることもなかった。

胸に塗りたいような粘液をまとった先端で、

下腹部や太ももを舐め回す。

リナリーはぎゅつと脚を閉じて抵抗しようとするが、

無理矢理開かされてしまった。

「くっ！ ひっ、卑怯よー？」

こんな格好させて、ああ、やめてっ、そこはっ！」

「そこは、どうした？ もっと触ってほしいのか？」

それとも、一息に犯してほしいか」

「ふざけないで！」

そんなこと、絶対に許さないんだから！」

AKUMAはまるで焦らすかのように、

女陰を避けて舐め回す。

内もものぎりぎりまで舌を伸ばしたかと思えば、

すぐに太ももへと逃れていく。

お尻の谷間を這ってきたかと思えば、

そのまま尻肉をひたすら揉みしだいた。

(駄目……声をあげちゃ駄目よ。)

喘いだら、AKUMAの思うつぽなんだから！」

しかしその我慢する顔だけでも、

AKUMAにとっては十分な愉楽。

リナリーはすでに、

AKUMAの術中にはまりきっているのだった。



「ははは、無様な格好だなエクソシスト！
マ○コの奥まで丸見えだぞ？」

「絶対に：絶対に許さない……！」

去勢を張るも、ひどい羞恥心と

生まれ始めた絶望感を拭いきれない。

リナリーは必死でもがき続けているが、

一向に反撃のチャンスはつかめなかった。

それどころかAKUMAの体液を

全身に塗られたくられ、肌が敏感になっている。

ただ触られただけでも、

体内に甘い痺れが駆けめぐった。

（感じたくないのに、無理矢理

感じさせられてる。このままじゃ、私……）

股間はすでに、

AKUMAの体液以外のモノで濡れ初めている。

それが官能による愛液だと認めたくはないが、

次々と溢れ出す愛液は止まらない。

「ほらほら、ここは感じるか？」

「ここはどうだ？ もっといい声で鳴いてみせろ」

身動きがとれないリナリー。

その口元に触手がぬめり寄る。

噛み付いてでも反撃してやろうと思うのだが、

うまくかわされてしまった。

歯噛みするも、

あまりうろたえては相手の思うつぼだ。

リナリーは決して負けじと、

もがき続けることしかできなかった。

ほらほら
もっと抵抗しないと

このまま
犬の格好で
犯してしまうぞ？

ほあ

ほあ

くっ！
言われなくても！
このままじゃ
終われない……！

さんさん胸や腹を撫で回して飽きたのだろうか。
リナリーの体を押し倒す。

「な、なに！？ いったいなにをする気なの！？」
「こうして、犬みたいな格好をさせて
犯してやつてもいいが……くくく」

尻の谷間を、執拗にねぶる触手の舌尖。
リナリーはその感触にゾツとする。

（お、犯される？ こんな状態で、
AKUMAに罫られるっていうの！？）

「しかし、まずはもっと感じさせてからだ。
早く犯して欲しいと叫ばせてやるぞ？」

そして、背中を舐め回し始めた。
そのこそばゆさに、思わず喘いでしまいうりナリー。

AKUMAはさもおかしいと言わんばかりに
笑いながら、白い背中を撫で続けた。

（背筋に悪寒が走るみたいだな、いやな感触……
でも、ずっと続けられちゃったら？）

背骨に沿って舌の触手が這い回った。
そして繊毛の触手が腰や脇を撫で回す。

くすぐったさと薄気味悪さにヒツと息を呑むリナリー。
触手たちはそれをあざ笑いながら、

尻肉をたつぷりと揉み込んだ。
「たつぷりとしたいい尻だ。」

ほら、ケツの穴がヒクついているのまで丸見えだぞ？」
卑猥な言葉を浴びせかけられ、羞恥にうめく。

その怒りも、次第に弱まってきた。
怒りよりも快感が勝り始めている。

そのことに気づいたりナリーは負けじと奮起する。
（絶対に、こいつを楽しませてなんかやらないんだからっ！）



あああああ
ああッ!

リナリーの喘ぎにAKUMAは
気を良くして責め続けていた。
腕を抱え上げて押さえ、
ピンと張った乳房を揉みしだく。
少し乱暴なくらいがちょうどよく、
リナリーのマソヒスティックな喘ぎを導く。
乳房を揉みながら、乳首をこねるのも忘れない。
時に強く、時にくすぐるように。
喘ぎはまた次の喘ぎを導き、
リナリーの心を溶かしていく。
しかしリナリーも負けてはいなかった。
なんとか声を抑え、快感を振り切ろうとする。
そんな我慢している姿をあざ笑うかのように、
AKUMAは膣へと指を埋め込んだ。
容赦ないひと突き。指の形にした触手を、
ペニスに見立てて何度も出し入れた。
ぐつちよぐつちよと響く水音は、
触手の粘液ではない。リナリーの愛液だ。
快感から溢れ出した愛液は、
堰を切ったように溢れ出し続けている。
もはや粘液の手助けなどいらぬとばかりに、
触手たちは愛液を塗りたくっていた。
(こ、このままじゃ私……私、
AKUMAにイカされちゃう……っつー!)
ズボツと指が膣奥まで潜り込んできた。
指は膣内で太い触手に変形する。
下手なペニスよりも激しいその挿入の衝撃に、
リナリーは我慢の限界を超えた。
「あああつ、いつ、イクっ!」
「いつちやうつ、あああああ!」
瞬間、乳首を強くつねられる。
膣内の触手が激しくうごめき回る。
激しい絶頂感がリナリーの女体を駆けめぐった。
アクメの痙攣に息を呑む。
(ああ、そんな……私、AKUMAにイカされた?
こんな奴に、犯されて……)
快感と絶望がない交ぜになり、
リナリーはしばし意識を薄めていた。



ゆ、指が
体中であわねってる！

あっ…

はっ！

このままじゃ
耐えられなく
なる！

たつぷりと背中を撫で回し、
体液をなすりつける、また仰向けにされる。
「そろそろ触手も飽きただろう。
人の手の形の方が、気持ちいいのではないかな？」
「な、なあ！？ こんななの、こんなの駄目え！！」
触手が人の手をかたどった。
ごつい男の手だ。それらが全身をまさぐってくる。
これまでの不可思議な感覚に比べ、
しつかりとした愛撫が性感を呼び起こす。
しかもその手には、
まるでオイルのような粘液がぬめっていた。
ぬるぬると触られるその感覚は、
あまりに強い官能。
乳房を揉み込み、乳首をつまむ。
太ももを押さえ込み、股間の谷間に指をすべらせる。
（何人もの男たちに、いっせいに嬲られてみたい！）
輪姦されているような気分は、
リナリーを被虐的な快感であふれさせた。
しかもその指先は、触手の時と同じように
細かな動きで快感を高めてくる。
絶妙の指戯。すべての手が、
テクニシャンな腕前を持っていた。
「やはり、この方が犯されている感じが
高まるみたいだな。いい顔をするじゃないか」
知らず喘いでしまっていたリナリーは、
あわてて口を閉じる。
しかしすでに遅い。一度溢れ出した喘ぎは、
次から次に官能の響きを奏で始める。
あまりの気持ちよさに、
その快感を押さえ込むことができなくなっていた。



「おいしい。宴はこれからだぞ、
エクソシスト……ほら、イクぞっ！」

「え……!?!? あ、ああああああ!?!?
駄目っ、入れないで……ああああ!?!
AKUMAは人の肉体を形取り、
ペニスをリナリーに突き立てる。

ただのペニスではない。触手でできたペニスだ。
それは激しく太く、うねっていた。

(中で動く!)

膣内をただ突き刺すだけじゃなくて、
中であごめいてる!?!?)

指の触手でイカされたときと同様、
ペニスの触手も同じようにうごめく。

普通に腰を動かし、

ペニスを行き来させるだけではない。

中でうねり形を変え、枝分かれさせている。

その先端には絨毛も生えていた。

膣内で、あらゆる形をとる触手。

その人外の挿入に、リナリーは一気に目を覚ます。

「こんなのっ、ああ、こんなのっ!?! 駄目……!?!」

「ははは!?! いい悲鳴だ。最高だ、

やつぱり強姦こそが本物のセックスだ!?!」

人であった頃から同じ考えだったのだろう。

AKUMAは喜びを隠しきれない。

ただ触手を動かすだけではおもしろくないと、
自ら激しく腰を振る。

その様は確かに人のセックスだが、

リナリーの膣内で暴れているのは触手なのだ。

人以上の官能を生み出させるそれは、

リナリーの怒りや敵愾心を壊していく。

(壊されちゃう!?! こんなことされ続けたら、
私、駄目になってしまっ!?!)

まさにそれこそが、AKUMAの目的でもあった。



あああ
あああ
あつあつ
!

AKUMAの強姦は、勢いを弱めることなくひたすら続く。ただ膣を犯すだけなどという生やさしいモノではなく、ありとあらゆる官能があった。

「お、おっぱいは駄目……」

ああ、お、お尻も、そんな……そんなところはああ！」

少しの反撃も許さぬとばかりに、

手足を触手で絡め取っていた。

そして乳房に絡ませた触手で、

まるで扱くように揉みまくる。

そそり立った乳首には舌のような触手を這わせ、

舐めるだけでなく時に吸い付く。

甘噛みするような触手の動きに、

リナリーはあられもない声をあげた。

（ああ、駄目。どうしても声が出ちゃう。）

どうしても気持ち良くなっちゃう！）

膣を犯され、そこから流れ流れた愛液を

まとわせた触手が肛門をまさぐった。

そして有無を言わさず中へとめり込み、

直腸内も犯していく。

膣を犯す触手と、粘膜の薄皮一枚

隔てたところで擦り合わせられた。

2穴を同時に犯される被虐的快感は、

リナリーから徐々に理性を奪っていた。

（こ、こんなの初めてっ、おかしくなる……）

イヤなのに、またイっちゃいそうになる！）

体の外も中も、あらゆる性感帯をまさぐられていた。

触られるだけでいきそうになる絶対的な快感。

しかしリナリーはまだ敗北していない。

いつそ負けてしまえば楽になるかもしれないのに、

理性がそれを許さなかった。



あああ
あああ
あああ
!

リナリーの体は、今や全身が性感帯であった。胸を揉まれて強く喘ぎ、

乳首をつねられただけで軽い絶頂感に痺れる。下腹部をまさぐられ、へそを舐め回されると、そこからも挿入されそうな感覚がある。

尻を撫で回されて快感がほとぼしり、アヌスを犯す触手に喘がされた。

尻穴を出入りする剛直にも、

何度か激しい痺れを感じさせられている。

(も、もう、これ以上イカされたら、

私……どうなっちゃうの?)

心の奥底で、ひどく冷静な自分が悩む。

しかし表面では喘ぎまくるばかり。

思考能力は失われ、ただ快感だけに

反応する体。もはや性の虜と言つてもいいほど。

しかしまだ、心は堕ちていない。

それはもはや、悲劇と言えた。

「さて……そろそろ、

膣内を精液で満たしてやろうか!」

AKUMAが笑う。リナリーはそれを、

まるで他人事のように聞いていた。

「人間の頃の精子も残ってるからな。

俺の……AKUMAの子供を孕むがいい!」

「え……? な、なにを……!」

言いしれぬ恐怖がわき上がった。

同時に、激しい絶頂感が襲いかかる。

「ああ、いや! イくつ?」

駄目つ、私、い、いきたくないっ!」

AKUMAの哄笑に誘われ、

これまでになく強い絶頂感が弾けた。

膣内を満たす熱い精液の感触も分かる。

子宮の中にまで滲んでくる感覚があった。

「あああああああ!」

駄目つ駄目え……あああ、あああ!」

「くくく……まだまだたつぷりと注ぎ込んでやる。

エクソシストがAKUMAの子を孕むんだ……

これは、すばらしいことじゃないか!」

絶頂に震えるリナリーは、膣内で

ふくれあがるペニスにうちひしがれるだけだった。



自分は簡単には負けないと
思っていたララ
弱点である敏感な尻尾を
集中的に責められ
手も足もでなくなる。
アソコに尻尾を挿入され
二重の快感を強要される。



「強い女をひざまずかせたい」
変態女に狙われた三国久美は
魔法の力でカラダは墮とされ、
逆にココロは覚醒状態にされ、
最後まで屈辱感を
味わいながら屈服させられる。



高級エステで夢見心地で
マッサージを受けるリンスレット
だったがそれは罠だった。
いつの間にか身動きができなくなった体に
複数の男の手が群がり
ひとつひとつの手がリンスを
イかせようと襲ってくる。



AKUMAの触手牢獄に捕らわれ
四方八方から襲ってくる
性欲の塊によって
淫靡なカラダに改造されてしまう
リナリー。